

## 新聞社説におけるテキスト構造の一考察：題材の配列をめぐって

単, 艾婷  
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程

松村, 瑞子  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1924426>

---

出版情報：言語文化論究. 40, pp.41-55, 2018-02-27. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

# 新聞社説におけるテキスト構造の一考察

—— 題材の配列をめぐる ——

単 艾婷<sup>1</sup>・松村 瑞子

## 1. はじめに

文章・テキスト<sup>2</sup>の全体構造 (macrostructure) と言えば、古来漢詩の作法に由来する「起・承・転・結」や能楽論に基づく「序・破・急」、西洋修辞学による「序論・本論・結論」などが一般的であるとされている。しかし、「もう少しジャンルを限定して考えるならば、このおおまかな一般的全体構造がもう少し明確な形で存在しており、時にはそれを満たすことが期待されているという場合も見出される」(池上 1983 : 37) と指摘されるように、文章・テキスト全般ではなく、ジャンルを限定すると、そのジャンル特有の構造を見出すことができると思われる。

そこで本稿は、書き手の考え方や立場を論理的に示す論説文の典型ともいえる新聞社説に注目し、題材の配列という観点から、社説がどのような配列を用いて論理展開を成しているのかを検討する。本稿が言う題材の配列とは、文章・テキストの材料や要素の組み立て方のことであるが<sup>3</sup>、この題材の配列を見ることによって、文章・テキストの展開の仕方およびその構造がより明確に捉えることができるかと期待されるからである。

## 2. 先行研究の概観

文章論における題材の配列に関する主たる先行研究としては、市川 (1978)、森岡 (1995)、長尾 (1992)、立川 (2005、2011) などが挙げられる。

市川 (1978) は、段落の内容を踏まえたその配置のあり方を「段落の配列」と呼び、それを (1) 「内容の性質面から見た配列」と (2) 「内容の相互関係から見た配列」の二側面から論じている。そのうち (1) 「内容の性質面から見た配列」については、段落の内容の質的相違に着目し、「事実を述べた段落」、「見解を述べた段落」、「事実と見解を交えた段落」の三種に分け段落の配置を説明している。一方、(2) 「内容の相互関係から見た配列」については、「対置的關係 (列挙、対照)」「相対的關係 (単純-複雑、既知-未知、漸減、漸増)」「対応的關係 (原因-結果、提示-根拠、課題-解決、原理-適用、全体-部分、一般-特殊、主要-付加、目的-手順・結果)」に分類している。

次に森岡 (1995 : 73) は、材料の配列について、「集めた材料を、検討、整理して、選んだものを、どういう順序で使っていくかというその並べ方の問題である」と定義し、「論を進める方法」あるいは「発想の型」と言ってもよいと述べ、次の八種類を挙げている。

- a 時間的順序
- b 空間的順序

## c 一般から特殊へ

## d 原因から結果へ（結果から原因へ）

先に原因を述べて、それから当然生ずる結果をあとづける場合と、まず、結果を述べて、それに基づいて原因を探す場合の両方がある。

## e 問題解決順

はじめに問題を示し、次にその解決策を述べる。

## f 既知から未知へ

はじめに読者の知っていることを述べ、それに基づいて知らないことを説明する。

## g クライマックス

重要さの低いものから高いものへと進み、最後を最も強調する。

## h 動機づけの順序

読み手の気持ちを順々に高めていって、白紙の状態から行動を起こす状態まで導いていく方法で、広告、宣伝文によく使われる。その順序は、(1) 注意を引く→(2) 必要を示す(問題提示)→(3) 必要を満たす(問題解決)→(4) 具体化して示す(証明)→(5) 行動に導く、となる。

(森岡 1995 : 73-76、太字は原文ママ)

以上のうち「h 動機づけの順序」は、文章の組み立てにおいて「五段の組み立て」と呼び、「第一段は注意を引く段階で、第二段は必要性を示し、何が問題かを告げる。それを受けて、必要を満たす段階である第三段で問題解決の方法を示す。第四段は具体化の段階で、その方法の優秀さを論証し、行動に誘う段階である第五段は、結論として実行するよう働きかけている」(森岡 1995 : 192-193)と説明している。さらに、この五段の組み立ては、人間の思考の順序に一致した機能的な組み立て方であり、論旨がスムーズに流れていくと指摘している。

さらに、立川 (2011) は、先行研究における配列理論を次の表 1 のようにまとめている。

表 1 日本語の文章における文章構造の類型

平井 (1970)	木原 (1973)	西田 (1992)	森岡 (1965)	澤田 (1978)	永野 (1972)	市川 (1978)
時間 空間 漸層	時間 空間 漸層	時間 空間	時間 空間 漸層	時間 空間	時間 空間 漸層	漸減・漸層
既知-未知 単純-複雑 原因-結果 特殊-一般 役立ち度 受け入れ度	既知-未知		既知-未知	既知-未知 単純-複雑 原因-結果 特殊-一般 重要さ	既知-未知 原因-結果 特殊-一般	既知-未知 単純-複雑 原因-結果 特殊-一般
	特殊-一般	原因-結果 特殊-一般 重要さ 興味	原因-結果 特殊-一般 重要さ 動機付け		身近	
	否定-肯定 消去法 疑問-解決	疑問-解決 全体-部分 原理-適応	問題解決順		疑問解決	課題-解決 全体-部分 原理-適応 提示-根拠
提示-根拠				列挙	手段-目的 列挙 対比	主要-付加 列挙 対照

(立川 2011 : 187)

森岡 (1995)<sup>3</sup> と市川 (1978) を含め、表 1 の中で列挙された先行研究については「具体的である一方、各研究の着眼点には偏りも見られる」(立川 2011: 186)。また、これらの先行研究にはすべての種類の文章を網羅しようとする傾向があり、文章の性質やジャンルなどに対する配慮が見られない。さらに、項目が相互に重複しているように見える場合もある。

立川 (2011) は、先行研究の配列理論を踏まえ、説明文の文章構造の「配列」を「拡張型」と「進展型」に大別した上で、次のように細分化している<sup>4</sup>。

表 2 説明文における文章構造の「配列」

文章構造の型	下位分類		具体的な「配列」関係の例
拡張型	—		列挙・対照・対比
進展型	相対的	時空間	時間・空間
		内容の密度(濃度)	漸増・漸減・連想・既知-未知 重要性・身近さ、役立ち度
		包摂	全体-部分・一般-特殊・主要-付加 抽象-具体・上位-下位
	論理的	因果	原因-結果・原理-適応・提示-根拠
		問題-解決	問題-解決・疑問-解決
論理		仮説-事実・主張-反主張	

(立川 2011: 188)

表 2 によれば、進展型は六つの下位分類から構成されているが、大枠としては相対的關係と論理的關係の二つから成る。立川 (2011) は、文章構造の単位として「文段」と「中核文」を認定したうえで、統括段落(中心段落)の位置から見た「推論形式」及び「配列」の二つの視点から分析を行い、次のことを指摘している。

(1)「推論形式」においては、「演繹型」及び「帰納型」を用いた「前件-後件」の二項構造が多用される。(2)「配列」では、包摂関係(抽象-具体、上位-下位など)といった相対的な「進展型」が中心となる。提喩(近接)<sup>5</sup>的な関係は事柄を整理し、読み手の理解を促すという点で有効である。また、説明文では「列挙」の手法も用いられており、事実描写を箇条書きの形で行うことが多く、そのような列挙のみの統括がない構造や二項構造といった極めて単純な構造が、説明文の文章構造の特徴である、とも指摘している。

立川 (2011) はそれまでの先行研究とは異なり、人間の理解過程の枠組みに沿った「推論形式」という新たな角度から、「配列」の観点を併用してマクロ構造の解明を行った。これは、文章・テキストの論理展開の新たな分析の可能性を示唆するものである。しかし、「推論形式」には主観的な要素が多々含まれるという問題があり、その点についての検討が必要となるであろう。

このほか、長尾 (1992) は、伝統的な日本語の文章論で用いられてきた「序論・本論・結論」「序・破・急」、「起・承・転・結」もその構造を十分には説明できないと指摘し、次のような論理展開の型を挙げた。

- (a) 問題提起-資料(実証)-結論
- (b) 主張-実証(資料)-結論確認
- (c) 具体事例-問題点指摘-資料補足-結論

- (d) 定義的解説－具体事例－発展的考察－主張
- (e) 問題提起－資料－仮説－資料補足（実証）－結論（仮説の修正）
- (f) 具体事例－問題点指摘－予測（仮説）－資料補足－結論

（長尾 1992：30）

以上のうち(c)では、初めに具体的な出来事などを紹介し、その中から自分が検討する問題点を抽出、そして、関連した資料を加えていき最後に自分の考えを述べるという形式である。この型について、長尾(1992：31)は「初めに具体例をあげて読み手の関心を引きつけるというところにこの型のねらいがある。ルポルタージュや新聞の論説などに頻出する形式で、書きやすく、しかも効果的な型でもある」と述べている。

以上、先行研究を概観してきたが、その問題点としては以下の三点が挙げられる。

第一は、文章の性質や種類に対する配慮に欠けている点である。つまり、文章の配列は、その性質や種類、目的によって、変わってくるのが考えられるため、ジャンルを限定した分析が必要ということである。第二は、先行研究で多く見られる「段落相互の関係」(漸層法、未知－既知など)は文章を網羅しようとする傾向があるため、具体的にどのように展開しているのかが不明な点である。さらに、配列の分類を中心とした研究がほとんどであり、具体的な事例を取り上げた分析は少ない。そこで本稿は、論説文の代表である新聞社説というジャンルに限定し、それがどのような論理的な展開の仕方をしているのかを見ていく。

### 3. 分析資料及び手法

#### 3.1 分析資料

本稿では分析資料として、『朝日新聞』『読売新聞』『西日本新聞』の社説を用いる。論説文の代表とされる社説は、文章の長さがほぼ一定で、取り上げられる素材が広い。また社説は複数の執筆者によって書かれているため、文体の個人的特徴といった弊害も避けることができる。各新聞とも2015年4月1日から4月30日の1ヶ月分とした。詳細は表3に示す通りである。

表3 分析資料の内訳

社説掲載の新聞名	期 間	社説の篇数 <sup>6</sup>
朝日新聞	2015.4.1～4.30	56
読売新聞		54
西日本新聞		48

#### 3.2 分析手法

一般的に、論理的な文章では「序論・本論・結論」という三段構成法が文章構成の基本的な型と言われている(鈴木 1989、メイナード 2005)。「導入部・中心部・終結部」(木原 1973)、「冒頭部・展開部・結尾部」(市川 1978)、「開始部(はじめ)・中間部(なか)・終了部(おわり)」(佐久間 2000)などの呼び名もあるが、本稿では新聞社説の論理展開の型を検討するために、それぞれ「Ⅰ導入部」、「Ⅱ展開部」、「Ⅲ終結部」と名付け、社説の構成部分を以下のように分類する。



図1 本稿で分析する社説の構成部分

ここでは、市川（1978）の「内容の性質面から見た配列」及び長尾（1992）で挙げた「論理展開の型」を参照しつつ、新聞社説の論理展開の型を検討する。

まず、市川（1978）の「内容の性質面から見た配列」<sup>7</sup>を参考にし、段落を「A 事実を述べた段落」「B 意見を述べた段落」「A + B 事実と意見を交えた段落」の三つに大別する。次に、長尾（1992）が挙げた「論理展開の型」の各構成部分の意図のネーミング<sup>8</sup>に従い、「A 事実を述べた段落」「B 意見を述べた段落」の「A 事実を述べた段落」（A 1 時事問題、A 2 問題提起、A 3 解説、A 4 資料）、「B 意見を述べた段落」（B 1 評価、B 2 主張、B 3 見解、B 4 感想）の下位区分を行う。詳細は以下の表4に示す通りである。

表4 題材配列の分析手法

内容の視点	意図の視点	定 義
A 事実を述べた段落	A 1 時事問題	現在話題になっていることや、関連ニュースの紹介
	A 2 問題提起	問題や課題を明示した部分
	A 3 解説	事実を説明した部分
	A 4 資料	意見を支えるために使う根拠、具体例など
B 意見を述べた段落	B 1 評価	事実または意見についての判断を述べた部分
	B 2 主張	テキストの話題について意見を述べた部分 (希望・警告・要望・提案・呼び掛けなど)
	B 3 見解	資料が提示された部分について意見を述べた部分
	B 4 感想	執筆者個人的な気持ちを表現した部分
A + B 事実と意見を交えた段落		AとBの組み合わせ

分析は三つのステップを通して行う。ステップ1では、社説の各段落の要旨をまとめる。続くステップ2では、内容のまとまりの大段落に分け<sup>9</sup>、それぞれの大段落に表4で分類したA、Bのラベル付けを行う。そして、最後のステップ3では、「文章・テキスト構成への適用」の図式化を行い、社説全体の配列を分析する。

#### 4. 分 析

新聞社説における題材の配列は、主に次の二つの型が観察された。

- (1) 説明型：ある事柄が提示されたあとに、見解を述べ、最後に主張が明示される。
- (2) 主張型：最初に主張が明示され、最後にもう一度主張が確認される。

以下、各型の詳細を見ていく。

#### 4.1 題材の配列 (1) 説明型

本節では本稿が対象とする社説において見られた題材配列の二タイプのうちの「説明型」を説明する。まず、その典型例として本稿末に置かれた「パイロット不足 安全第一を徹底せよ」(朝日 2015/04/08-1) という見出しの社説例 1 を見られたい。この社説は 11 段落からなり、各段落の要旨は次のようになる。漢数字 (一) (二) (三) … は段落番号、算用数字 (1) (2) (3) … は文番号を示す。

##### ステップ 1：各段落の要旨

- |      |           |   |
|------|-----------|---|
| (一)  | (1)       | 【事実】 国際的な操縦士不足                              |
| (二)  | (2) (3)   | 【事実】 日本でも操縦士不足「2030年問題」、対策検討中 <sup>10</sup> |
| (三)  | (4) (5)   | 【事実】 短期策                                    |
| (四)  | (6)       | 【意見】 空のネットワークを充実させるメリット・意義                  |
| (五)  | (7) (8)   | 【意見】 乗客の安全・安心の最大の責任者は操縦士                    |
| (六)  | (9)       | 【事実】 ドイツの墜落事故                               |
| (七)  | (10)～(12) | 【意見】 ドイツの墜落事故の原因                            |
| (八)  | (13)～(15) | 【事実+事実+意見】 ドイツ機の事故を受け、健康管理を                 |
| (九)  | (16)～(18) | 【事実】 中・長期的な対策                               |
| (十)  | (19) (20) | 【事実+意見】 操縦士手続きの不備などを要注意                     |
| (十一) | (21) (22) | 【意見】 操縦士の質の維持・向上、安全面の呼び掛け                   |

##### ステップ 2：内容のまとまりの大段落分け及びラベル付け

- |         |  |
|---------|--|
| (一) (二) | 【事実】 国際的な操縦士不足、日本でも「2030年問題」、対策検討中<br>＜A 2 問題提起＞   |
| (三)～(八) | 【事実→意見→事実→意見→事実→意見】<br>短期策の内容・意義、具体例ドイツの墜落事件の提示、健康管理を<br>＜A 3 解説→B 3 見解→A 4 資料→B 3 見解→A 3 解説→B 3 見解＞ |
| (九) (十) | 【事実→意見】 中・長期策の内容、具体例、手続きの不備を要注意<br>＜A 3 解説→B 3 見解＞   |
| (十一)    | 【意見】 操縦士の質の維持・向上、安全面の呼び掛け<br>＜B 2 主張＞  |

##### ステップ 3：文章・テキスト構成への適用

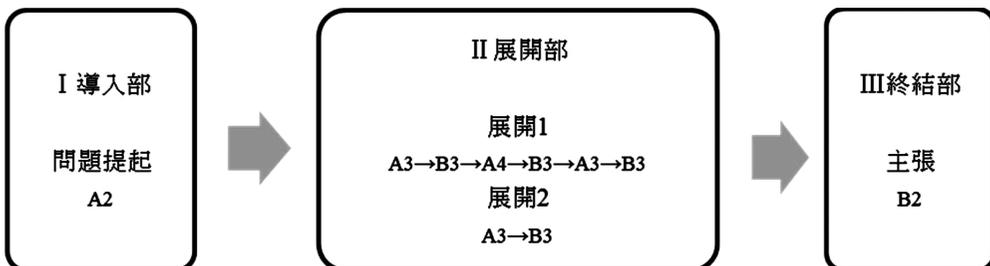


図 2 社説例 1 の題材配列

社説例1は、I 導入部で、LCCの定着・拡大で航空機の乗客が増えるにつれ国際的な操縦士不足が大きな問題になっており、日本も「2030問題」を抱え、国土交通省が対策を検討中という問題提起をしている。

次にII 展開部では、I 導入部で提示された問題に対する具体的な対策を述べている。さらにこの展開部は二つの部分から構成され、前半は問題解決策1－短期策、後半は問題解決策2－中・長期策に関する内容となっている。具体的には、まず前半では、短期策の内容「外国人の積極活用、操縦士の年齢上限の引き上げ、使用可能な医薬品の拡大、通常は機長昇格まで7～8年という副操縦士の期間の短縮など」が解説されている。それに対し、「LCCを含む空のネットワークを充実させることは重要だが、乗客の安全・安心の最大の責任者は操縦士である」と書き手の見解が述べられる。具体的な事例として「ドイツのLCCの墜落事故」を取り上げ、操縦士の健康管理に的を絞ってほしいといった書き手の見解が示される。一方、後半では、中・長期策の柱は「私立大学など民間養成機関の拡充」であると指摘され、「桜美林大学で手続きの不備の発見」があったことを述べ、そのようなことは見過ごすわけにはいかない、と注意を喚起している。

最後にIII 終結部では、操縦士不足の穴埋めよりむしろ、その質の維持・向上や事故を未然に防ぐことの重要性について述べている。

以上をまとめると、I 導入部で問題提起し、II 展開部で問題解決策について解説と見解を繰り返しながら論を進め、最後に、III 終結部で主張へ至ることになる。

#### 4.2 題材の配列(2) 主張型

一方、題材配列のもう一つのタイプ「主張型」は、本稿末に置かれた「日中韓観光会合 訪問客拡大へ協調を深めたい」(読売新聞2015/04/14:2)という見出しの新聞社説2がその典型である。この17段落からなる社説を社説例1と同様に、ステップ1からステップ3に分けて分析すると次のようになる。

##### ステップ1：各段落の要旨

- |      |          |                                     |
|------|----------|-------------------------------------|
| (一)  | (1)      | 【意見】旅行者の増加を通じ経済活性化や政治的な緊張緩和につなげたい   |
| (二)  | (2)      | 【事実】日中韓の3国間を行き来する人を2020年に3000万人に増やす |
| (三)  | (3)      | 【事実】目標に向けて航空路線の充実やクルーズ船の拡大          |
| (四)  | (4)      | 【事実】平昌や東京五輪を見据え、欧米などに東アジア観光を売り込む    |
| (五)  | (5)(6)   | 【事実】観光相会合は、4年ぶりの開催、対話の成果が強調される      |
| (六)  | (7)      | 【意見】3国の観光振興で協調する姿勢は評価できる            |
| (七)  | (8)      | 【意見】日中韓がそれぞれ観光をテコに成長を促進したい          |
| (八)  | (9)      | 【事実】日本を訪れた外国人の数は、2年連続で過去最高を更新       |
| (九)  | (10)     | 【事実】アジアからの旅行者急増が主な要因                |
| (十)  | (11)(12) | 【事実】このうち中国人客の「爆買い」が話題になる            |
| (十一) | (13)     | 【意見】中国などの旺盛な購買力を取り込むメリットは大きい        |
| (十二) | (14)     | 【事実】中国や韓国も日本人観光客を増やしたい              |
| (十三) | (15)     | 【事実】中韓を訪れる日本人旅行者は近年減少傾向             |
| (十四) | (16)     | 【意見】円安、歴史認識や中韓に反感を覚える人が増加           |
| (十五) | (17)     | 【意見】中韓が反日の姿勢を改めなければ、観光の「互惠」は望めない    |

- (十六) (18) (19) 【事実】 共同声明は「観光の質向上」を図ること盛り込んだ  
 (十七) (20) (21) 【意見】 観光のマナー向上に連携して取り組む必要がある

### ステップ2：内容のまとまりの大段落分け及びラベル付け

- (一) 【意見】 旅行者の増加を通じ経済活性化や政治的な緊張緩和につなげたい  
 < B 2 主張 >
- (二)～(七) 【事実→意見】  
 日中韓の観光相会合における共同声明の発表、3国が観光振興で協調する姿勢の評価  
 < A 1 時事問題→B 1 評価 >
- (八)～(十五) 【事実→意見→事実→意見】  
 日本を訪れた外国人数の増加、中韓を訪れる日本人旅行者の減少  
 中韓が反日の姿勢を改めなければ、観光の「互惠」は望めまい  
 < A 3 解説→B 3 見解→A 3 解説→B 3 見解 >
- (十六) (十七) 【事実→意見】  
 共同声明は「観光の質向上」を図ること、マナー向上に連携して取り組むことの呼び掛け  
 < A 3 解説→B 2 主張確認 >

### ステップ3：文章・テキスト構成への適用

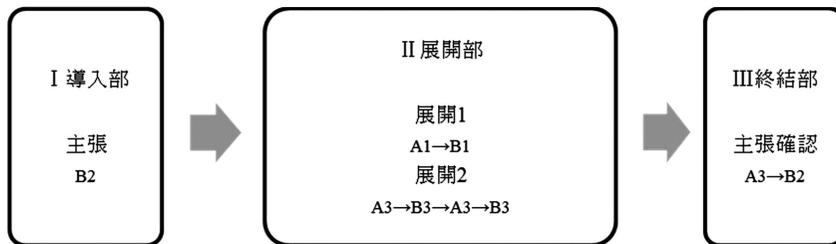


図3 社説例2の題材配列

社説例2は、I 導入部では、見出しとほぼ同様の「旅行者の増加を通じ、経済活性化や政治的な緊張緩和につなげたい」といった内容で明確な主張が示されている。

次にII 展開部については、その前半では日中韓の観光相会合が採択した共同声明を紹介し、政治的な対立でぎくしゃくする3国が観光振興で協調する姿勢を評価している。一方、後半では3国の観光事情及び問題点が指摘されている。具体的には、まず前半では、日中韓の観光相会合で採択された共同声明の「3国間を行き来する人を2020年に3000万人に増やす」、「航空路線の充実やクルーズ船の拡大を進める」、「平昌や東京五輪を見据え、欧米などに東アジア観光を共同で売り込む」といった内容を紹介、また、観光相会合自体は、日本と中韓の関係悪化で11年を最後に中断されていたが4年ぶりに開催となったというように対話の成果が強調された。3国が観光振興で協調する姿勢を評価し、それぞれ観光をテコに成長を促進したいためだと理由付けている。続く後半では、まず日本の観光事情「日本を訪れた外国人客数は2年連続で過去最高を更新」「アジアからの旅行者急

増が主な要因で、訪日客は台湾、韓国、中国の順で多い」「このうち中国人客の『爆買い』が話題に」などと指摘し、「中国などの旺盛な購買力を取り込むメリットは大きい」と見解を述べている。一方、中国や韓国でも日本人観光客を増やしたいと考えてはいるものの、減少傾向が続いていると解説されている。円安、歴史認識や中韓に反感を覚える人が増加と理由付けをして、「中韓が反日の姿勢を改めなければ、観光の『互恵』は望めまい」との見解を示している。

最後のⅢ終結部では、採択された共同声明は「観光の質向上」という内容も盛り込んでおり、観光での交流拡大はマナー向上と連携して取り組む必要がある、と呼び掛けている。

以上をまとめると、Ⅰ導入部では主張が述べられ、Ⅱ展開部では具体的な時事問題がその解説と見解を繰り返しながら展開されていく。そして、最後のⅢ終結部では、主張がもう一度提示されている。

## 5. 分析結果と考察

次に、本稿が対象とする新聞社説の題材配列を上で見たと「説明型」、「主張型」のどちらに属すかで分析した結果を示す。表5を見られたい。

表5 題材配列の分析結果

	朝日新聞	読売新聞	西日本新聞
(1) 説明型	44 (78.57%)	17 (31.48%)	41 (85.42%)
(2) 主張型	12 (21.43%)	37 (68.52%)	7 (14.58%)
合計	56 (100%)	54 (100%)	48 (100%)

表5から分かるように、(1)「説明型」は、『朝日』78.57%、『読売』31.48%、『西日本』85.42%を占めている。(2)「主張型」は、それぞれ21.43%、68.52%、14.58%である。このことから、『西日本』と『朝日』は(1)説明型を多用する傾向があるが、『読売』は(2)「主張型」が全体の68.52%を占め、最初に主張を明示し、最後に再度主張を確認することが多いということが分かる。

次に、Ⅰ導入部、Ⅱ展開部、Ⅲ終結部それぞれの基本的パターンを見ると、次のようなものが挙げられる。

表6 導入部・展開部・終結部の基本的なパターン

Ⅰ 導入部	(1) 時事問題を紹介する。 (2) 問題や課題を提起する。 (3) 主張を述べる。 (4) 用語や概念を定義する。 (5) 引用する。 (6) 問い掛け、自問自答する。 (7) 感想を述べる。
Ⅱ 展開部	(1) 時事問題や話題に対する評価を述べる。 (2) 問題提起や問題の指摘をする。 (3) 時事問題や話題の背景または詳しい内容を解説する。 (4) 具体例などの資料を挙げる。 (5) 見解を述べる。
Ⅲ 終結部	(1) 主張を述べる。 (2) 結論を述べる。

また、(1)「説明型」と(2)「主張型」の論理展開は、次のようにまとめられる。

表7 「説明型」と「主張型」の論理展開

	I 導入部	II 展開部	III 終結部
(1) 説明型	話題導入	議論 解説→見解→解説→見解→…… (A → B → A → B →……)	主張 (結論)
(2) 主張型	主張	話題導入→議論 解説→見解→解説→見解→…… (A → B → A → B →……)	主張確認 (結論)

「説明型」の社説のI導入部では「話題」が導入されるが、そのパターンは「時事問題の紹介」、「問題や課題の提起」、「主張の提示」、「用語や概念の定義」、「引用」、「問い掛け、自問自答」、「感想の提示」というように非常に多様である。一方、「主張型」の社説のI導入部のパターンは「主張」だけである。

次に、「説明型」の社説のII展開部は、「時事問題や話題に対する評価」、「問題提起や問題の指摘」、「時事問題や話題の背景または詳しい内容の解説」、「具体例などの資料の提示」、「見解の提示」からなる。一方、「主張型」の社説のII展開部は、まず話題を導入してから議論に入る。しかしながら、「説明型」も「主張型」も、展開において解説と見解を繰り返して議論する形を取っている点では共通している。具体的には、まず話題の具体的な内容または背景について解説を行い、その後見解を述べ、資料補足などを解説しながら、また見解を述べるという繰り返しである。つまり「解説→見解→解説→見解→…(A → B → A → B →…)」と繰り返す傾向が見られる。このように事実を出しながら見解を提示すると、読み手にはその見解に対する解釈をゆだねられており、最終的に読み手自身が新聞社(として)の意見を捉えることが可能になる。つまり、書き手が事実を先に提示することによって、読み手が別の異なる意見を持ちうる余地が与えられると言える。

最後のIII終結部では、展開部の議論を経た上で、主張が導かれるが、書き手の意見の表明や読み手に対する行動の呼び掛けなどが述べられることが一般的である。

『朝日』『西日本』の2社ともに(1)説明型が多く見られることから、「説明型」の文章・テキストが読み手にとって理解しやすい題材の配列であると言えるだろう。中村(1995:57)は、「説明型」の題材配列は、「論理的な秩序にしたがって、ものごとを端から順を追って述べる書き方である。これがもっとも自然で単純な文章展開であり、基本的な型とっていい」と述べ、また森岡(1995:193)も「人間の思考の順序に一致させた機能的な組み立て方であり、論理がスムーズに流れていく」と述べている。一方『読売』は、まずI導入部で主張を提示し、II展開部で話題を導入してから議論に入る。別の言い方をすれば、『朝日』『西日本』の題材の配列「説明型」の部分の前に「主張」が加えられている形式であると言える。「説明型」も十分に日本人の読みやすさに則したスタイルであるが、先に主張を提示する「主張型」は、読み手に対する読みやすさの配慮の一つの戦略として選択されたものではないかと考えられる。

## 6. おわりに

文章・テキストがどのように展開するのかは、個々の文章・テキスト特性に応じて特徴付けられる。本稿は、新聞社説がどのような配列を用いて論理展開を成しているのかを分析した。社説全体

を「Ⅰ導入部」、「Ⅱ展開部」、「Ⅲ終結部」に分けて検討を行い、以下の三点を明らかにした。

- ① 新聞社説の題材配列には、(1)「説明型」と(2)「主張型」という二タイプが確認された。「説明型」とは、ある事柄を提示したあとに、見解を述べ、最後に主張を明示するというもので、「人間の思考の順序に一致させた機能的な組み立て方であり、論理がスムーズに流れていく」(森岡 1995:193)と指摘されている。一方、(2)「主張型」とは、最初に主張が明示され、最後にもう一度主張が確認されるというものである。今回資料として用いた3紙のうち『朝日新聞』『西日本新聞』は(1)「説明型」を多用していたが、『読売新聞』では、(2)「主張型」の展開が多く見られた。
- ② 社説の「Ⅰ導入部」では、「時事問題の紹介」、「問題や課題の提起」、「主張の提示」などのように多様性が見られた。また、「Ⅱ展開部」では、「時事問題や話題に対する評価」、「問題提起や問題の指摘」、「時事問題や話題の背景または詳しい内容の解説」、「具体例などの資料の提示」、「見解の提示」などを通して議論が行われる。最後の「Ⅲ終結部」は展開部の議論を経て主張が導かれるが、書き手の意見表明や読み手に対する行動の呼び掛けなどが一般的である。
- ③ 題材の配列(1)「説明型」及び(2)「主張型」は、Ⅱ展開部分とともに「解説→見解→解説→見解→…(A→B→A→B…)」のように、論を進めていくことが分かった。事実を出しながら、見解を示す。書き手が読み手に解釈をゆだねることにより、最終的には読み手自身に主張・意見を捉えさせるということになる。

今回は新聞社説に限定して分析したが、今後は他のジャンルも対象としながらさらなる検討を行ってきたい。

## 注

- 1 九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程大学院生
- 2 永野(1986:68)によれば、文章とは、原則として文の連続によって成り立ち、内部において統一した文脈を保ちつつ、全体として完結した言語形式を具え、前後に言語として顕在した他の文脈をもたぬものである。また高崎・立川(2010:11)は、テキストとは「その内容に完結性や統一性を持った実際に運用される言語の意味的な単位である」と定義している。つまり文章・テキストは、内部において意味のまとまりのある統一体である。本稿で用いる「文章・テキスト」は、これらの定義に従う。また、「文章」と「テキスト」の用語は特に区別しない。
- 3 森岡(1995)は、立川(2011)が挙げた森岡(1965)の新版である。
- 4 立川(2011:187)は、「拡張型」と「進展型」の相違について、「主題の展開という視点から、拡張型では主題が反復、対比(これは新主題の提示を含む)されるのに対し、進展型は主題が敷衍する性質を持つという点にある」と述べている。
- 5 「接近性」について、立川(2011:221)は「一般には修辞法の一部として、その下位分類に換喩と提喩が置かれるが、説明文のマクロ構造では、意味的傾向(提喩的)の強い『抽象-具体』、『上位-下位』といった包摂関係がしばしば用いられる点が注目される」と述べている。
- 6 『朝日』『読売』『西日本』から当初収集したのは、それぞれ58篇、57篇、51篇であったが、各社説の分量を平均にするため、通常より非常に長いと見受けられるものは分析対象から外した。

- 7 市川（1978）は、「内容の性質面から見た配列」を「事実を述べた段落」「見解を述べた段落」「事実と見解を交えた段落」の三つに分類している。本稿は「見解」の代わりに「意見」という用語を用いた。また分析上の便宜から、A・Bの記号を加えた。
- 8 「意図のネーミング」は樺島（1990）の用語である。なお木戸（1992）は、「文の機能」の観点から「意見」を「主張」「評価」「理由」、事実を「根拠」「解説」「報告」に分類している。
- 9 本稿では、段落を要約する際に石黒（2014：269）を参照した。【要約のさいに重要な文】①一般的な内容を表す文、②ほかの文をまとめる文、③前提となる状況を設定する文、④評価や主張を含む文。
- 10 文（2）と文（3）はともに「事実」であるため、「事実+事実」ではなく、一つの「事実」と表記した。以下同様。

### 参 考 文 献

- 池上嘉彦（1983）「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育Ⅰ』（日本語教育指導参考書11）国立国語研究所 pp.7-42.
- 石黒圭（2014）『よくわかる文章表現の技術Ⅱ — 文章構成編 — [新版]』明治書院
- 市川孝（1978）『文章論概説』教育出版
- 樺島忠夫（1983）「文章構造」水谷静夫 [編]『朝倉日本語講座 5 運用Ⅰ』朝倉書店 pp.118-157.
- 樺島忠夫（1990）『日本語のスタイルブック 新装版』大修館書店
- 木戸光子（1992）「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』55, pp.9-19.
- 木原茂（1973）「文章構成の基本的なパターン」『国文学 解釈と教材の研究』18（12）pp.15-23.
- 佐久間まゆみ（2000）『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』平成9～11年度科学研究助成費研究成果報告書（課題番号09834006）開成出版株式会社
- 澤田昭夫（1978）『論文の書き方』講談社現代新書
- 鈴木英夫（1989）「文章の構成」山口佳紀 [編]『講座日本語と日本語教育 第5巻 日本語の文法・文体（下）』明治書院 pp.84-116.
- 高崎みどり・立川和美（2010）『ガイドブック文章・談話』ひつじ書房
- 立川和美（2000）「説明的文章の構造認定の方法に関する試論：読解活動における文章構造の理解」『国語学』51（2）pp.163-164.
- 立川和美（2005）「狭義説明文のジャンル特性と文章構成に関する試論」『国文』102, pp.67-58.
- 立川和美（2011）『説明文のマクロ構造把握 — 国語教育・日本語教育への指導・応用に向けて —』流通経済大学出版会
- 長尾高明（1992）「文章と段落」『日本語学』11（4）（115）pp.26-32.
- 永野賢（1972）『文章論詳説』朝倉書店
- 永野賢（1986）『文章論総説 — 文法論的考察』朝倉書店
- 西田直敏（1973）「文章の段落展開のタイプ」『国文学 解釈と教材の研究』18（12）pp.24-30.
- 西田直敏（1992）『文章・文体・表現の研究』和泉書院
- 平井昌夫（1970）『文章表現法』至文堂
- 泉子・K・メイナード（2005）『談話表現ハンドブック』くろしお出版
- 森岡健二（1965）『文章構成法 — 文章の診断と治療』至文堂
- 森岡健二（1995）『文章構成法 新版』東海大学出版会

## 【資料】

## 社説例1：「パイロット不足 安全第一を徹底せよ」（朝日2015/04/08-1）

- (一) (1) 格安航空会社（LCC）の定着・拡大で航空機の乗客が増えるにつれて、国際的な操縦士不足が大きな問題になっている。
- (二) (2) 日本でも、40歳代に偏る操縦士が15～20年後に一斉に定年退職する「2030年問題」への懸念に加え、昨年には操縦士不足からLCCで欠航が相次ぐ事態となった。(3) 危機感を強めた国土交通省は、昨年夏の審議会提言を受けて、対策を検討中だ。
- (三) (4) 短期策としては、外国人の積極活用、操縦士の年齢上限の引き上げ、使用可能な医薬品の拡大、通常は機長昇格まで7～8年という副操縦士の期間の短縮などを掲げた。(5) 今月下旬に年齢の上限を「65歳未満」から「68歳未満」とするなど、順に実施に踏み切っている。
- (四) (6) LCCを含む空のネットワークを充実させることは、国内の旅行客や訪日客を伸ばし、経済活性化につなげるためにも欠かせない。
- (五) (7) しかし、乗客の安全・安心を揺るがしてはならないことは論をまたない。(8) その最大の責任者であり、緊急時に最後の頼みの綱ともなるのが操縦士である。
- (六) (9) ドイツのLCCの墜落事故は、そんな当たり前のことを改めて考える機会となった。
- (七) (10) 原因を軽々に特定することは控えるべきだが、副操縦士が病を抱えていたこと、操縦室で1人になった際に意図的に機体を降下させたことは、どうやら事実のようだ。(11) なぜ副操縦士の乗務を事前に止められなかったのか。(12) 全世界の航空会社が突きつけられた問いである。
- (八) (13) わが国の審議会の報告書には、航空会社の健康管理部門への指導の強化や、乗務員の疲労リスク管理システムの導入検討が盛り込まれた。(14) ただ、これらは「健康管理を強化しつつ、もっと働いてもらう」という狙いがある。(15) ドイツ機の事故を受け、まずは健康管理に的を絞るべきではないか。
- (九) (16) 操縦士不足の中・長期的な対策の柱が、私立大学など民間養成機関の拡充だ。(17) 国の指定を受け、技能審査まで行うことで国の試験を省略できる。(18) 産官学の協議会は奨学金の創設など学生の負担軽減策を急いでいる。
- (十) (19) ところが、そんな大学の一つである桜美林大（東京）で手続きの不備が見つかり、同大学が指定を返上する事態となった。(20) 資格を取った学生の技量を国が確かめたところ問題はなかったというが、見過ごすわけにはいかない。
- (十一) (21) 不足の穴埋めより、操縦士の質の維持・向上である。(22) 事故が起きてからでは遅いことを、国交省は肝に銘じてほしい。

## 社説例2：「日中韓観光会合 訪問客拡大へ協調を深めたい」（読売2015/04/14-2）

- (一) (1) 旅行者の増加を通じ、経済活性化や政治的な緊張緩和につなげたい。
- (二) (2) 日中韓の観光相会合が開かれ、3国間を行き来する人を2020年に3000万人に増やすとする共同声明を採択した。
- (三) (3) 14年の1・5倍にあたる野心的な目標に向けて、航空路線の充実やクルーズ船の拡大を進める。
- (四) (4) 18年の韓国・平昌冬季五輪や、20年東京五輪を見据え、欧米などに東アジア観光を共同で売り込むことも明記した。

- (五) (5) 観光相会合は、日本と中韓の関係悪化で11年を最後に中断され、4年ぶりの開催となった。(6) 会合後、太田国土交通相は、「関係改善に向けた対話を積み重ねることができた」と成果を強調した。
- (六) (7) 政治的な対立でぎくしゃくする3国が、観光振興で協調する姿勢を示したことは評価できる。
- (七) (8) 日中韓が足並みをそろえたのは、それぞれ観光をテコに成長を促進したい思惑があるためだ。
- (八) (9) 日本を訪れた外国人客数は、14年に1341万人に達し、2年連続で過去最高を更新した。
- (九) (10) アジアからの旅行者急増が主な要因で、訪日客は台湾、韓国、中国の順が多い。
- (十) (11) このうち中国人客は、日本での買い物が目的の人が多い。(12) 中国の旧正月にあたる今年2月には、中国人旅行者が日本製の家電や日用品を大量に買い集める「爆買い」が話題になった。
- (十一) (13) 人口減少によって国内の消費市場の縮小が見込まれる日本にとって、中国などの旺盛な購買力を取り込むメリットは大きい。
- (十二) (14) 一方、成長減速が鮮明な中国や、通貨ウォン高を背景に景気が悪化している韓国にも、日本人観光客を増やしたい事情がある。
- (十三) (15) ところが、中韓を訪れる日本人旅行者は近年、減少傾向が続き、どちらもピーク時より3割超減少しているという。
- (十四) (16) 円安で海外旅行が割高になっただけでなく、歴史認識や竹島、尖閣諸島の問題を巡って対日批判を繰り返す中韓に反感を覚える人が増えているのだろう。
- (十五) (17) 中韓が一方的な反日の姿勢を改めなければ、観光による「互恵」は望めまい。
- (十六) (18) 今回の共同声明は、「観光の質向上」を図ることも盛り込んだ。(19) 中国人観光客などの一部が、生活習慣の違いなどから、トラブルを起こすケースが多いためだ。
- (十七) (20) 観光での交流拡大が、かえって国民同士の反発を強めてしまっは意味がない。(21) マナー向上に、連携して取り組む必要がある。

## A Study of Text Structures in Newspaper Editorials: With Special Reference to the Sequence of Subjects

Aiting SHAN and Yoshiko MATSUMURA

This paper analyzes the sequence of subjects used for logical development in newspaper editorials. Texts are cited from *Asahi Shimbun*, *Yomiuri Shimbun* and *Nishi Nippon Shimbun*. The editorials were divided into three parts: introduction, development and conclusion.

As a result, two types of newspaper editorials are identified: (1) explanatory type and (2) claim type. *Asahi Shimbun* and *Nishi Nippon Shimbun* tend to use the explanatory type frequently. It is conceivable that an explanation type sequence is “a functional construction method that matches the order of human thinking, allowing logic to flow smoothly” (Morioka 1995: 193). On the other hand, *Yomiuri Shimbun* often states claims first, and later reasserts the conclusions.

In the introduction of the editorials, topics are presented by using strategies such as “introducing current affairs,” “posing problems and tasks,” “stating assertions” and so on. The introductions take various forms. After the discussion in the development part of the editorials, the final part leads to conclusions or claims. In this part it is common to express opinions of writers or calls for action.

In both the explanatory type and the claim type of subject sequences, the development part follows the pattern of “explanation → opinion → explanation → opinion → ... (A → B → A → B ...),” in order to advance the discussion. While presenting facts, the writers also state their views. It is possible that the writer entrusts the interpretation to the readers, and the readers ultimately assert the opinion themselves.